福沢諭吉と日本の近代出版

第 68 回湘南科学史懇話会
20140406
竹中英俊

はじめに：趣旨と自己紹介と結論

[趣旨]

日本における出版状況は、電子書籍の先行きが見通せないまま、通常書籍の売上も 1996 年をピークに、連続的に減少している。今後、出版と本はどうなるのであろうか。このような状況にあって、日本における近代出版の祖と言うべき福沢諭吉に遡って出版を考えてみたい、というのが、今回の懇話会報告の趣旨である。

福沢諭吉（1835-1901）は、「読む人＝書く人＝作る人」を一身に体現し、「人が人になる」ソフトとハードの整備に最大の力を注いだ、明治期日本最大のメディア戦略家と呼ぶことができる。福沢諭吉は、自らを「読書渡世の一小人」と称し、日本に「コピーライト＝版権」という考えを紹介し、また慶応義塾を興し、さらに福沢屋諭吉と名乗って自営出版を始め、ベストセラー『学問のすゝめ』を著し、慶応義塾出版局（のち、慶応義塾出版社）を作り、明六社に参加し、東京学士会院の会長となり、交詢社を組織し、そして時事新報社を設立した人物である。

今回の懇話会報告では、このような広義の出版人としての福沢諭吉に焦点をあてて、彼の事績から、今、何を学ぶことができるか、探ることとしたい。

[自己紹介]

1952 年生まれ。早稲田大学を 1975 年に卒業。財団法人東京大学出版会には卒業以前の 1974 年に就職する。委託製作部門を経て、1980 年に編集部に異動、1991 年に東京大学出版会労働組合執行委員長、1992 年に編集部長、1997 年に編集局次長兼編集部長、2001 年に編集局長兼編集部長、2005 年に常務理事兼編集局長兼編集部長、2008 年に常務理事兼編集局長、2011 年 10 月は常務理事、2012 年 4 月から常任顧問。

編集者としては「横断媒介」をキー概念として、人と人とを結ぶ出版の基点に立った編集企画を目指した。企画・編集に関わった点数は、DVD を含め、402 点。シリーズ企画について整理は末尾参照。

[結論]
〇福沢諭吉は本屋が書籍の企画＝制作＝販売を担っていた「江戸出板システム」を変革して「近代出版システム」を作り出した。それは「出板」から「出版」への概念の革命であった。同様な、システム変革と概念革命が今、“パブリケーション”に求められている。
〇慶応義塾（若人が集い学び交わり人となる）、明六社（知識人が集い学び交わり人となる）、東京学士会院（学者が集い学び交わり人となる）、交詢社（社会人・実業人が集い学び交わり人となる）⇔人と人・人と組織・組織と組織とを、むすび・つなぎ・いかす媒介（メディア）としての慶応義塾出版社・時事新報社→公共時空間の形成。
〇出版は「本を作る」こと、あるいは「本を作って売る」こと（だけ）ではない。福沢諭吉の営為が示すように、出版は「人が人となる公共時空間を作る」ことである。

１．三つの文化革命について

日本の活字印刷は、16 世紀末のヨーロッパ経由と朝鮮半島経由との二つの流れがあり、その消長を経て、明治の近代印刷出版文化を形成した。

16 世紀前後：キリシタン版と古活字版とによる、第一次印刷出版文化革命＝テキストという考え方の成立。

幕末維新期：西洋文化流入による、第二次印刷文化革命＝著作権という考え方の成立。

21 世紀転換期：コンピューター化・グローバル化による、第三次印刷出版文化革命＝印刷出版という考え方の変容。

２．近代出版について

〇近代国家は教育国家であり、教育国家の重要なパートが学校であり、出版である。

〇近代出版が成立するには、書籍の需要が十分にあること（層としての読者の成立）、著作権が保障されること（権利としてのコピーライトの成立）、継続的な発行者が存在すること（組織としての出版社の成立）が必要。

〇近代出版が成立したと言えるのは、明治 10 年代から 20 年代であるが、その先駆的存在として福沢諭吉が明治 5 年 8 月に作った慶応義塾出版局がある。

３．福沢諭吉について

朝日世界人名事典より抜粋＋書き換え
生年： 天保 5.12.12 （1835.1.10） 没年： 明治 34.2.3 （1901）

中津藩(大分県)藩士福沢百助と妻お順との 5 子として大坂蔵屋敷で生まれた。2 歳のとき父に死別。中津に帰り、13,4 歳のころから漢学を学ぶ。安政 1(1854)年長崎に赴いて蘭学を学び、２年大坂に出て緒方洪庵の適塾に入門、やがて塾長を務めた。5 年江戸に下り、鉄砲洲の中津藩邸内に蘭学塾を開く。３年、横浜に遊んで英学の重要性を痛感、英語の学習を始めた。万延 1(1860)年幕府の軍艦咸臨丸の艦長の従僕を志願して渡米。また文久 2(1862)年幕府の遣外使節に随行。その経験をもとに『西洋事情』初編(1866)を著した。慶応 3(1867)年幕府の軍艦受取委員の随員としてアメリカ東部諸州を視察。『西洋事情』外編(1868)、『世界国尽』(1869)などを刊行。 明治 1(1868)年塾を芝新銭座に移し,「士民を問わずいやしくも志あるものをして来学せしめん」と、名称を慶応義塾とした。
『学問のすゝめ』初編(1872)は、第 17 編(1876)まで書き継がれて総発行部数 340 万におよんだ。

明治 6（1873）年、漢学者・儒者を含む洋学派知識人が集った明六社に参加。7（1874）年、公に言論を開陳することの重要性を指摘して、慶応義塾に演説館を設け、率先して範を示した。『文明論之概略』(1875)は、諸国の文明を比較的に論じながら,自由な交流と競合による民心・衆心の発達によって日本が文明国として独立しうることを説く。

12（1879）年には西周・加藤弘之らと東京学士会院(のちの日本学士院)を創設、初代会長となり、13（1880）年には知識の交流と世務の諮詢を目的とする交詢社を設立、明治 14 年の政変を経て 15（1882）年には『時事新報』を創刊。

明治 17（1884）年、「脱亜論」。32（1899）年、『福翁自伝』。

竹中稿①：日本の大学出版部の創生：福沢諭吉の西洋体験

日本の大学出版部の魁として明治 5 年・1872 年設立の慶応義塾出版局を挙げた。ここでは、同出版局をつくった福沢諭吉に考えたい。まずは、諭吉が書籍や出版に関心を抱いた事由の一端を紹介してみよう。

福沢諭吉が文久 2 年・1862 年に幕府の遣欧使節に随行してヨーロッパ諸国を巡遊したときの日記である『西航記』は、さまざまな視点から読むことが可能な記録である。同時に、万延元年・1860 年の遣米使節随行の経験を合わせ踏まえて『西洋事情初編』を準備する巡行の記録であった点でも重要である。1867 年の渡米を含めた福沢の 3 度の外国体験は『福翁自伝』に福沢自身の言葉で表現されていて、それはそれとして大変興味深い。同時に、生の資料としてのこの日記も大いなる関心を引く。

『福沢諭吉書簡集』第 8 巻月報（20002 年 6 月）に寄せた杉山伸也のエッセイによると、明治 12 年の『民情一新』に特徴的な「文明の利器」としての「蒸気船車、電信、郵便、印刷」への注目は、『西航記』に記録される「テレガラーフ

局」「伝信」への関心にさかのぼるという。
杉山に習い私は、「文明の利器」としての近代「書籍」への注目は、『西航記』に記録される「蔵書庫」「書籍」への関心にさかのぼる、と主張したい。『西航記』から抜粋する。
8 月 2 日ペテルスブルグ：《蔵書庫に行く。書籍の数、板本九十万冊、写本四万冊。右の内、魯西亜出板の書は僅に六万冊のみ。古書あり、これは千四百四十年独逸出板の経書なり。是欧羅巴最古の板本と云。》
閏 8 月 3 日パリ：《巴里に書庫七所あり。今日見所は最大なるものなり。書籍百五十万巻。》
ペテルブルグの蔵書庫での「古書あり、これは千四百四十年独逸出板の経書なり。是欧羅巴最古の板本と云。」は、まさにグーテンベルクの『四十二行聖書』であろう。福沢諭吉は、西洋近代最古の金属活字印刷本をじかに見た最も早い時期の一人であろう。
福沢の近代書籍との接触体験において彼が意識していたのは、幕末日本の蕃書調書（1856 年）→洋書調書（1862 年）→開成所（1863 年）ではないだろうか。
1867 年の第 3 回目の海外派遣の際に、福沢は幕閣と軋轢を起こすほどの大量の書籍を購入した。この大量の書籍が福沢の明治期の活動の基盤をなす。そして、その活動は、日本での大学出版部の先駆につながるのである。

４．福沢屋諭吉について
『福沢諭吉事典』より抜粋
《福沢は偽版対策のためと、従来の書林が出版元としてかなりの利益をあげていたことに対する著作者としての不満から、出版事業の自営化に乗り出した。福沢は数寄屋町の紙問屋鹿(加)島屋から土佐半紙を千両の即金で買いつけて、芝新銭座にあった慶応義塾の土蔵に積み込んだ。次に書林から版摺り職人を貸してもらい、何十人も集めて仕事をさせ、その職人から業界の内部事情を聞き出し、版木師や製本仕立師も次々に引き抜いて、最終的には版下書き・版木彫り・版摺り、製本、売り捌きの全工程を、福沢の直轄下に組み込むことに成功する。一方、既得権益を侵害された書林から苦情が出るのを見越して、書林の問屋組合に加入した。そのときの屋号が「福沢屋諭吉」である。
現場では旧中津藩士の八田小雲と松口栄蔵が監督に当たった。福沢のもとで全工程が行われたため、慶応義塾には福沢や門下生らの著作版木が大量に伝存している。その後、出版物の激増に伴い従来の個人商店から大規模で本格的な組織への 発展を図り、出版事業を慶応義塾の教育事業と有機的に関連づけるため、明治 5（1872）年 8 月に慶応義塾出版局へ発展的解消を遂げた。しかし書林組合の名簿には､8 年 9 月の出版条例によって書林組合が有名無実化するまで、

「福沢屋諭吉」で登録され続けた。だが「福沢屋諭吉」はあくまでも書林組合の登録名で、出版元の名称として刊本に明記された例は確認されていない、という。》

竹中稿②　福沢諭吉の自営出版第一作と「福沢屋諭吉」

松沢弘陽校注『新日本古典文学大系　福沢諭吉集』では福沢の自営出版第一作は『雷銃操法』巻之二と推定している。これは「[福沢塾が置かれた中津藩屋敷のあった]鉄砲洲で版木彫刻・版木校合まで終え新銭座[福沢塾が慶応 4 年 4 月に移転した所]で版摺から製本までを行なって売捌きという工程が考えられるのではないか」(449-450 頁)とある。

国会図書館の近代デジタルライブラリーで『雷銃操法』巻之二を見ると、その見返しには「一八六七年第二月　英国開彫」「福沢氏蔵版」とあり、奥付には「慶応三年丁卯暮春　東都書林和泉屋善兵衛発兌」とあるが、実際の刊行は慶応４年＝明治 1 年の夏以降とされる。自営出版第一作を確定するには、この奥付と実際の刊行との差が１年以上あるのをどう説明できるかが課題である。（巻二の奥付は巻一の奥付の流用の可能性もあるか。また、巻三の奥付は自営出版にふさわしく「禁偽版」「慶応義塾蔵版」としている。）

明治改元前に自営出版を始めた福沢諭吉に対し《【石河幹明の】『福沢諭吉伝』所引の浅倉屋久兵衛談は、福沢のような「素人に勝手に出版されては営業が迷惑であるからいよいよ本業とせらるゝなら本屋仲間に加入」してほしいと本屋側から苦情が出た。》（長尾正憲『福沢屋諭吉の研究』思文閣出版、230 頁）という。

福沢諭吉は、この苦情に対し、明治２年 11 月、妥協して、「福沢屋諭吉」の名で書物問屋組合に加入し出版自営業を強化するという段取りになり、これが、明治 5 年 8 月の「慶応義塾出版局」設立につながる。ただし「福沢屋諭吉」の版元名で出版されたものはない（『福沢諭吉事典』の「福沢屋諭吉」の項)。

版権思想の紹介と実践

福沢は『西洋事情』（慶応２年～明治３年）を著し、この「外篇」で、福沢はコピーライトの考え方を日本に初めて紹介。「蔵版の免許」と訳している。

自らが出版活動を始めてから、政府（中央・地方）に対して「重版[偽版]の防止・禁止」をしきりに訴え、その際に「版権」という言葉を使用。

５．慶応義塾出版局について

この組織は明治 7 年に会社組織となり、名称を「慶応義塾出版社」と改めたが、『学問のすゝめ』『文明論之概略』などの福沢の著作や慶応義塾関係者の書

籍を刊行しただけでなく、現在の警視庁や東京大学医学部の本も刊行していた。

竹中稿③：日本の大学出版部の創生：慶応義塾出版局／社

大学出版部に職を奉じている者として、日本の大学出版部の創生はいつかについて関心をよせてきた。今日に続く大学出版部という意味では、明治 19･1886 年に東京専門学校出版局の名称で設立された早稲田大学出版部が嚆矢である。しかし、大学出版部の先駆的存在である慶応義塾出版局（社）も重要である。これは、明治 2・1869 年の福沢屋諭吉を継いだものである。いつ設立され、いつ幕を閉じたのか。

石河幹明『福沢諭吉』（昭和 10 年）によると、「慶応義塾出版局」の設立は明治 5・1872 年である。《慶応義塾が三田に移った翌年の明治五年には、塾の邸内に出版局と名づくる出版所が設けられ、先生の著訳書をここで出版することになった》（161 頁）とある。そして《三田に移った当初は在来の長屋を印刷所とし売りも此処でやってゐたところ、出版物の売行が非常に増して来て小規模の工場では間に会はなくなったので、慶応義塾出版局なるものを創立し、・・・事業のますます繁昌するに従ひ其組織を改めて合資会社となし、出版局の名を出版社に改めた。》（163 頁）富田正文『考証福沢諭吉』上（1992 年）377 頁では、出版局の設立を明治 5 年 8 月としている。これは、福沢諭吉名で東京書林組合に加入したことに依拠していると思われる。

そして、石河『福沢諭吉傳』第 3 巻（1932 年）では、時事新報は三田の慶応義塾出版社で発行していたが、明治 16 年 10 月に日本橋丸善の近く、日本橋通 3 丁目 11 番地に移転し、《十七年七月に慶応義塾出版社を時事新報社と改称した。》また、第 2 巻 95 頁では、《明治十年頃から朝吹［英二］を始め主なる社員は他に転じ、其後は中島精一が事業を担任していたが、明治十五年に「時事新報」を出版社から発兌することになったので、従来の出版事業は中島に譲渡してしまった。》とある。これで見ると、慶応義塾出版局／社は、明治 5 年に誕生し、15 年には従属的なものとなり、そして 17 年 7 月に消えたということになる。まだ、慶応義塾において大学が構想される以前の話である。

今日の慶応義塾大学出版会は、明治 5 年設立の慶応義塾出版局／社とは組織的連続性はないが、精神的・理念的に継承している大学出版部である。

６．交詢社について

竹中稿④：『交詢社の百二十五年』

竹田行之氏より『交詢社の百二十五年　知識交換世務諮詢の系譜』をいただいた。竹田氏の執筆になり、財団法人交詢社の発行、慶応義塾出版会の制作、非売品。

福沢諭吉の三大事業として、慶応義塾、交詢社、時事新報があげられる。福沢に関心を寄せつつも交詢社については知識を持っていなかったこともあり、本書を読んでみて、いろいろと考えさせられた。
①著者の意図とは異なるであろうが、強引な言い方をすると、ハバーマスやアレントの主張する公共圏ないし公共空間（それは理念的な要素が強いが）に即して日本を考える場合、交詢社を事例にして見る必要があるのではないか、と思ったことである。つまり、公共圏や公共空間の原初的な可能性の一つとして交詢社があり、その活動が十分に展開されなかった近代日本の条件を探ることが、日本の市民社会の不在ないし未成熟を探ることになるのではないか、ということである。
たとえば、大正政変に際し「フランス大革命におけるコーヒー店」に、「交詢社のストーヴ会議」が類比されたように(『太陽』大正 2 年 4 月号)、「知識交換世務諮詢」とは必然的に公共の関心事たる政治と相渉るように、交詢社の意図と存在の意義は深い。
③大学出版部は「ユニバーシティ・エクステンション」（大学拡張ないし大学教育拡張）の一環として位置づけることができるが、交詢社は「ユニバーシティ・エクステンションのエクステンション」として位置づけることもできるのではないか、ということである。慶応義塾では、明治 8 年に三田演説館が開館し、また万来舎も 9 年設けられている。塾員以外にも開かれた舎での講義はまさにユニバーシティ・エクステンションであり、13 年の交詢社は、これを塾関係者以外にも、また地方にも広げた、画期的な構想である。
以上、社会と大学が大きく変化しようとしている今、交詢社の事績から学ぶことはきわめて大きい。（T）

７．東京専門学校出版局／部について

明治 17 年ころに慶応義塾出版社が消えて、その後を継ぐものはあったのだろうか。「学問の独立」を謳った慶応義塾の双生児のようにして明治 15 年 1882 年に登場したのが「学の独立」を謳った東京専門学校である。明治 19 年 1886 年、ここに東京専門学校出版局が生まれる。

竹中稿⑤：東京専門学校出版局／部から早稲田大学出版部へ

1886 年明治 19 年に東京専門学校出版局（東京専門学校出版部→早稲田大学出版部）が講義録の刊行を目的としてできます。その点、高等教育機関の出版部として最初から自覚的に設立され運営されたのは、慶応よりは早稲田ですが、慶応義塾出版社は東大医学部編集の教科書（『医科全書　生理篇　一～四』および『医科全書　眼科篇一～四』）も刊行しており、大学出版部の魁として高く評価できると考えています。

ここでは慶応や早稲田の出版を例としてあげましたが、明治 19 年に帝国大学が出来る前の東大の出版はどうなっていたのか、というと、実はよくわかっていません。ただ、お雇い外国人による教育が主の時代でありまして、大学での講義は日本語ではなく、また教科書や参考書も日本語でなかったと言われていますように、おそらく、日本語の出版の緊急性がそれほど高くなく、出版が活発に行われたのではないのではないか、と推測されます。

その点、東京専門学校などは、東京大学を卒業してすぐの人たちが教育の第一線にたったわけですし、また私立ですので多くの学生を集める必要がありましたので、日本語の出版、それも全国の人びとを対象とした講義録の刊行となったのです。では、この講義録の刊行にはどのような背景があったのでしょうか。

日本における大学出版部 UP の起源は、オクスブリッジとは異なっています。歴史的には、ジョンズ・ホプキンズ大学の実践から学んでいまして、それは大学の創設と同時期に University Extension のひとつの活動として UP が位置付けられていることに共通性があります。ジョンズ・ホプキンズ大学は、1876 年に創設されました。初代の学長 D. C. ギルマンは、大学に不可欠な勢力として（教授陣と図書館とともに）大学出版部を位置付けました。それを担う部門として UP Agency を大学創設からそれほど時をおかず 1878 年に設立しました。これが 1891 年に Johns Hopkins Press に、翌 1892 年に Johns Hopkins University Press となっています。この大学出版部設立の背景として University Extension の考え方があったわけです。

このジョンズ・ホプキンズの大学院に学んで学位を取得した日本人として、新島襄の同志社に学んだ家永豊吉（いえなが・とよきち）がいました。1890 年に帰国して東京専門学校（1882 年創設、のち早稲田大学）の講師となり、UE の思想を広めました。それに触発されて、東京専門学校の創設者の一人である高田早苗（たかだ・さなえ）が、1886 年に作られた東京専門学校出版部を発展させて、早稲田叢書の刊行を始めたのが 1895 年のことでした。叢書の第 1 冊目は、後のアメリカ大統領で当時ジョンズ・ホプキンズ大学の教授である W. ウィルソンの『政治汎論』(The State, 1889) です。その「早稲田叢書出版の趣意」には UE について次のように書かれています（大意）。

《東京専門学校は欧米に行われている「ユニヴァーシティ・エクステンション」の制度に倣って、あるいは講義録を発行し、あるいは講座を地方において開いて、学問の普及を図る。したがって、この翻訳書の出版もただ世間学生に便宜を図るためだけでなく、広く士君子[市民]が世に処する際の導きの書を供給したいがためである。》

イギリスにおいては 1867 年、ケンブリッジ大学のジェームズ・スチュアート

による工場地帯に行っての学術講演に端を発するといわれますが、日本での自覚的なUEはジョンズ・ホプキンズ経由であると言えましょう。
＊家永豊吉は、ジョンズ・ホプキンズ大学院にいたときに、大学の「旅行講義」（社会人を対象とした大学外での講義）に参加しています。また、1890年の帰国後、東京大学の「国家学会」でUEについて講演していますし、東京専門学校の『同攻会雑誌』に「大学教育普及運動」を紹介する論文を載せています（1892年1月の第10号と2月の第11号）。
＊＊家永豊吉は、明治20年代に慶応義塾で教鞭をとっており、福沢諭吉と一緒の写真もあるが、慶応義塾のUEと関わりがあったかは、分らない。

竹中稿⑤:大学出版部の嚆矢

日本において大学出版部はいつできたのか。そのことを確認したいと思い、この正月に内田満著『早稲田政治学史断章』（三嶺書房、二〇〇二年）を繙いた。著者は早稲田大学名誉教授で日本の政治学の泰斗。その業績を集成した『内田満政治学論集全3巻』（早稲田大学出版部、二〇〇〇年）の第1巻『日本政治学の一源流』は、そのまま「大学出版部の一源流」を解き明かす考察と重なっている。『断章』はこれに続くもの。

その第2章「「早稲田叢書」の世界」の冒頭に「わが国における大学出版部の嚆矢としての東京専門学校出版部の発足は、東京専門学校創立から四年を経た一八八六年である」と明記されている。（「東京専門学校出版局」名で始まり、学校直営に際し「出版部」となり、一九〇二年の早稲田大学発足に伴い、「早稲田大学出版部」と改称。）

特に、一八九四年八月に出版部長に就いた高田早苗のリーダーシップで企画された「早稲田叢書」は本格的な大学出版活動を印象付ける。これは欧米名著の翻訳と早稲田関係者の講義・研究の成果の発表を意図したもの。ウッドロー・ウィルソン『政治汎論』（高田訳）で九五年にスタートしたこの叢書は、翌年アルフレッド・マーシャル『経済原論』（井上辰九郎訳）を、また早稲田関係者では、中村進午『新条約論』（九七年）を皮切りに姉崎正治『宗教学概論』、安部磯雄『社会問題解釈法』などを刊行している。〇九年までの翻訳24点を含む43点のリストはまさに大学出版部のモデルのひとつを示している。

日本の大学出版部は、一八六九年の福沢屋諭吉をつぐ七二年の慶応義塾出版局を魁とし、今日に続く大学出版活動は八六年の東京専門学校出版局に始まり、国立系では戦後一九五一年の東京大学出版会を最初とする、と描けるのではないか。著者におうかがいしたかったが、内田先生は一月二六日に忽然として逝かれてしまった。　（T）

０．むすびとひらき：福沢諭吉から何を学ぶか

[いま、“パブリケーション“は面白い]

付録：竹中企画（シリーズのみ）
1980 年代―：学派を横断媒介する政治学の編集出版　『現代政治学叢書』全 20 巻（1988－2012 予定）、『講座国際政治』全 5 巻(1989)、『行政学叢書』全 12 巻（2006－）、『国際政治学講座』全 4 巻（2004－）
1990 年代―：専門を横断媒介する地域研究の編集出版　『東アジアの国家と社会』全６巻(1992－93)、『講座現代アジア』全４巻（1994）、『中東イスラム世界』全９巻(1995－98)、『現代中国の構造変動』全８巻(2000－01)、『日英交流史』全５巻（2000－01）、『現代南アジア』全６巻（2002－03）、『イスラーム地域研究叢書』全８巻（2003－05）、『アメリカ文化史』全 5 巻（2005－06）
2000 年代―：学問を横断媒介する社会科学・公共哲学の編集出版　『社会科学の理論とモデル』全 12 巻（2000－10）、『公共哲学』全 20 巻(2001－06)、『シリーズ物語り論』全 3 巻（2007）、『公共する人間』全 5 巻（2010-11）
2000 年代―：時代を横断媒介する復刊・新装版の編集出版　『新装版　日米関係史：開戦に至る十年』全 4 巻（2000）、『近代日本の思想家』全 11 巻（2007－08）、『日本政党史論』全７巻（2011）

福澤諭吉著作一覧 – 初期刊本

凡例

- 排列は出版年順です
- 各著作は、デジタルで読む福澤諭吉へのリンクがあります。全文を表示できるばかりでなく、内容の検索も可能です。
- Google ブック検索に収録されているものはリンクがあります。PDF でダウンロードも可能です。

- **増訂華英通語**(1860)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A01-01
- **西洋事情 初編 3 巻外編 3 巻二編 4 巻**(1866)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A02-01
- **雷銃操法 3 巻**(1866)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A03-01
- **西洋旅案内 2 巻**(1867)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A04-01
- **條約十一国記**(1867)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A05
- **西洋衣食住**(1867)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A06
- **兵士懐中便覧**(1868)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A07
- **訓蒙窮理圖解 3 巻**(1868)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A08-01

- **世界国盡**(1869)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A13-01
- **洋兵明鑑 5 巻**(1869)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A09-01
- **掌中萬國一覧**(1869)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A10
- **英國議事院談 2 巻**(1869)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A11-01
- **清英交際始末 2 巻**(1869)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A12-01
- **啓蒙手習の文 2 巻**(1871)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A14-01
- **童蒙をしへ草 5 巻**(1872)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A16-1
- **かたわ娘**(1872)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A17
- **學問のすゝめ 17 巻**(1872)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A15-01
- **改暦辨**(1873)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A18
- **帳合之法 4 巻**(1873)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A19-01
- **日本地圖草紙**(1873)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A20

- **文字之教 2 巻附録 1 巻**(1873)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A21-01
- **會議辯**(1874)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:1874
- **文明論之概略 6 巻**(1875)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A23-01
- **學者安心論**(1876)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A24
- **分権論**(1877)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A25
- **民間経済録 2 巻**(1877)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A26-01
- **通俗民權論**(1878)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A29
- **福澤文集 初編 2 巻二編 2 巻**(1878)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A27-01
- **通俗国権論 初編 1 巻二編 1 巻**(1878)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A30-01
- **通貨論**(1878)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A28
- **民情一新**(1879)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A31
- **國會論**(1879)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A32

- **時事小言**(1881)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A33
- **時事大勢論**(1882)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A34
- **帝室論**(1882)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A35
- **兵論**(1882)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A36
- **徳育如何**(1882)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A37
- **學問之獨立**(1883)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A38
- **全國徴兵論**(1884)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A39
- **通俗外交論**(1884)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A40
- **日本婦人論　後編 1 巻**(1885)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A41
- **士人處世論**(1885)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A42
- **品行論**(1885)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A43
- **男女交際論**(1888)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A44

- **日本男子論**(1888)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A45
- **尊王論**(1888)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A46
- **国會の前途・国會難局の由来・治安小言・地租論**(1892)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A47
- **實業論**(1893)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A48
- **福翁百話**(1897)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A49
- **福澤全集緒言**(1897)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A50
- **福澤先生浮世談**(1898)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A51
- **福翁自傳**(1899)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A52
- **女大學評論・新女大學**(1899)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A53
- **明治十年丁丑公論・瘠我慢之説**(1901)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A55
- **福翁百餘話**(1901)
  全文: デジタルで読む福澤諭吉
  マイクロフィルム:F7 A54

福沢諭吉著作一覧

HOME ABOUT DG KUL SITE MAP

DG_KUL (Digital Gallery of Keio University Library)

Digital Gallery of Rare Books & Special Collections

FUKUZAWA COLLECTION デジタルで読む福澤諭吉

Digital Gallery > About FUKUZAWA > FUKUZAWA BOOK Table

並び替え ID 順 年代順 読み順

検索 (サンプルキーワード : 深切 / 惑溺 / 独立) | 検索対象一覧

001 増訂華英通語. 上

003 西洋事情. 初編. 一

013 雷銃操法. 一

016 西洋旅案内. 上

018 條約十一國記

019 西洋衣食住

020 兵士懐中便覧

021 訓蒙窮理圖解. 上

024 洋兵明鑑. 一

029 掌中萬國一覧

030 英國議事院談. 一

032 清英交際始末. 上

034 世界国盡. 一

040 啓蒙手習の文. 上

042 學問のすゝめ. 初編

061 童蒙をしへ草. 初編.

066 かたわ娘

067 改暦辨

一

068 帳合之法．初編．一

072 日本地圖草紙

073 文字之教 ： 第一文字之教

076 會議辯

077 文明論之概略．巻之一

083 學者安心論

084 分権論

085 民間経済録．初編

087 福澤文集．上

091 通貨論

092 通俗民權論

093 通俗国権論

095 民情一新

096 國會論

097 時事小言

098 時事大勢論

099 帝室論

100 兵論

101 德育如何

102 學問之獨立

103 全國徵兵論

104 通俗外交論

105 日本婦人論．後編

106 士人處世論

107 品行論

108 男女交際論

109 日本男子論

110 尊王論

111 国會の前途・国會難局の由来・治安小言・地租論

112 實業論

113 福翁百話

114 福澤全集緒言

115 福澤先生浮世談

116 福翁自傳

117 女大學評論･新女大學

118 福翁百餘話

119 明治十年丁丑公論･瘠我慢之說

COPYRIGHT © KEIO UNIVERSITY ALL RIGHT RESERVED.